

95 昭和56年度 県指定文化財の紹介

その2

絵画

1. 絹本着色不動明王像 1幅 (室町時代)
長浜市宮前町13-45 舎那院

本紙 縦173.4cm 横110.1cm

絹本着色。掛幅装。

画絹は、中央に幅41cmの絹、その左右に約34cmの絹を縫いだ三副一鋪である。瑟瑟座に結跏趺坐する不動明王一尊を描く。不動はいくぶん斜め右を向いて、瞋目し、上歯で下唇を噛み、頭頂に蓮華を戴き、肉身は緑青を墨で隈取る。光背は頭光と火焰光とからなり、朱と丹で描いた火焰は台座下辺にまで広がっている。耳飾り、胸前の瓔珞、臂釧・腕釧・足釧のほか、首から長い紐で腹飾りを吊り、それらには金泥を駆使用する。(説明)顔を少し右に向けながら、目は正面をにらみ、右臂を強く横に張って剣を持ち、左手は外側に差出し



絹本着色不動明王像 長浜市 舎那院

て素を下げ、瑟瑟座に結跏趺坐する青不動尊を描く。頭光と火焰光を表し、火焰が台座下辺にまで及んでいる。おおむね、高雄曼荼羅の不動に図像上類似している。その忿怒の形相や着衣の描法、あるいは髪や眉の毛筋、装身具、着衣の文様に金泥を用いることなどから、室町時代の作品とみられ、画面の大きいことも特筆されよう。

2. 絹本着色釈迦三尊十六羅漢像 1幅

(南北朝時代)

近江八幡市宮内町日触19-9 瑞龍寺

本紙 縦101.2cm 横59.3cm

絹本着色。掛幅装。一副一鋪。

画面上辺に釈迦如来像および文殊菩薩、普賢菩薩を描き、さらに、なかほどから下辺にかけて十六羅漢像を点在させる。背景には深山溪谷の自然景を描き、雲文、岩はだ、打ちよせる波を表す。釈迦如来像は二重円相の光背をつけ、蓮華座上に結跏趺坐する。肉身は朱で輪郭して金泥を塗る。着衣は偏袒右肩の朱衣で、その裾は蓮台から垂下する。左脇侍(向かって右)は、



絹本着色釈迦三尊十六羅漢像 近江八幡市 瑞龍寺

通例のものとは逆に、普賢菩薩を配す。蹲った六牙の白象の上の蓮台に、左足を踏み下げて合掌して坐す。肉身に白色を塗る。右脇侍の文殊菩薩は、蹲る獅子の背の蓮台上で、右手に如意を執り、左手は膝上に置く姿で、普賢と同じように左足を踏み下げる。十六羅漢は、すべて敷物に坐し、姿勢や方向はまちまちであるが、まとまりのある構図となっている。

(説明)深山溪谷を背景として、釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩に十六羅漢を加えた構図は、鎌倉時代後期から見られるが、蹲る獅子や象に文殊、普賢が左足を踏み下げて坐す遺例は極めて

少ない。中国の宋元絵画の影響を受けたものとみられ、その写実的な作風や色彩の華麗なところなどから、制作は南北朝時代ごろにおくのが妥当であろう。

3. 絹本着色不動明王二童子像 1幅 (鎌倉時代)
甲賀郡水口町大字北脇189 柏木神社

本紙 縦78.5cm 横39.0cm

絹本着色。掛幅装。一副一鋪。

中央岩上に不動明王が、斜め右を向いて立ち、右手に剣を握り、左手に索を垂下して執る。画面右下の岩上に真横を向いて合掌する矜羯羅童子が立ち、左に制吒迦童子が左手を額にかざし右手に棍棒を握って立つ。岩間に飛泉が落ち、岩に波が打ち寄せる。不動明王は両眼を開き、右牙で上唇を、左牙で下唇を噛む。肉身は墨線で輪郭して群青を塗り、髪は金泥の細線を引いて表す。卷毛で頭上に七髻を結び、左頬に弁髪を垂らす。条帛は橙地に朱の衣文線、裳は青に金泥の暈して湧雲をあしらひ、縁は緑に金泥の衣文でうめり。火焰は朱の暈して表す。矜羯羅童子は白肉身で墨の細線で輪郭し、髪は墨線、着衣の文様は金泥を盛り上げる。制吒迦童子は赤肉身を墨線でくくり、着衣の縁に金泥



絹本着色不動明王二童子像 水口町 柏木神社

を用いる。

(説明) 中央の岩上に斜め右を向いて青不動尊が立ち、その下方に矜羯羅、制吒迦の二童子を小さく描く。不動尊の忿怒の形相、激しい火焰の描写、二童子の軽妙な姿など、さらに三尊が立つ岩に飛泉や波しぶきを描き添えるところから見て、鎌倉時代後期における不動画像の優品と考えられる。

彫刻

1. 木造阿弥陀如来立像(裸形) 1軀 (鎌倉時代)
大津市大江町3-18-12 浄光寺

像高 100.2cm

螺髪を彫出し、白毫相を表して、耳朶不通、三道を彫出する。腹下に蓮華形をつけただけの全裸像で、右手を屈臂して、左手は垂下して掌を後方にむけて、ともに第1・2指を捻じ、両足をやや開いて立つ。

杢。寄木造。彫眼。白毫、水晶嵌入。頭部は、耳の後で前後に矧ぎ、内削りを行って軀部に差し込む。軀部は正中線よりやや右寄りて左右に矧ぎ、内削りを施す。右腕は、肩、臂、手首、左腕は肩、手首をそれぞれ矧ぐ。右大腿部内側に小材を寄せ、両足先にも別材を矧ぐ。頭部にだけ漆箔を施していた可能性がある。



木造阿弥陀如来立像 大津市 浄光寺

寺伝によると、もとは摂津国多田村にあった本像は、江戸時代に瀬田大江の立像寺に移され、明治初年に立像寺が浄光寺と合併し、以来浄光寺の本尊として安置されているという。

(説明) 裸形像は記録の上では平安時代後期から存在したらしいが、現存遺例としては、鎌倉時代以降のものが多く、たとえば兵庫浄土寺の迎講用の阿弥陀如来立像(半裸)、奈良伝香寺の地藏菩薩立像(全裸)などが著名である。この種の像は、元来は信者の縫った布製の法衣を着せるのをたてまえとし、藤原風の趣をのこした温雅な面貌を表し、肢体のつくりも少年風の肉身をよくとらえ、その堅実な作風は賞すべきものがある。制作は鎌倉時代前期に遡るものと考えられ、県内はもとより、全国的にみても貴重な遺例である。

2. 木造 如来形坐像
菩薩形立像 2 軀 (平安時代)

守山市立入町110 東福寺

如来形坐像 像高 148.4cm

螺髮彫出。白毫相を表し、彫眼、耳朶環状、三道彫出とする。通肩の衲衣をつけ、現状では膝上で法界定印を表して、右足を外にして結跏趺坐する。

桧。寄木造。白毫水晶嵌入。彫眼。肉身漆箔。着衣古色。軀幹部の前面は、頭体を通して正中線で左右二材矧ぎとし、背面は両耳後線で後頭部に一材を矧ぎ、体部背面の正中線からやや右寄りで左右二材を矧ぐ。両体側は、肩から地付までを各一材でつくり、若干、小材を矧ぎ足す。両袖先はそれぞれ二材を矧ぎ、両手首部一材を膝上にのせる。膝前部は、体部との間にマチ材をはさんで、横木一材を寄せる。裳先別材。像全体に内刳りを施す。顎の下の方14cmのところ、頭部と体部とを方形に切断している。割首の一種であろうか。

菩薩形立像 像高 180.4cm

宝髻を結び、天冠台を彫出して、地髪はまばらに彫り出す。耳朶環状、三道彫出。条帛をかけ、下半身に裳(折り返し二段)をつけ、左手を屈し、右手を垂下して立つ。

桧。寄木造。彫眼。肉身漆箔。着衣古色。軀幹部は頭体を通して正中線で左右に二材を寄せ、割首とし、内刳りを施す。背面腰部に小判型の薄材一枚を当てる。両肩先、両足先、天衣をそれぞれ矧ぎ、裳裾の両端に



木造如来形坐像 守山市 東福寺

も小材を矧ぎ足す。

(説明) 東福寺本堂内陣の正面壇上に安置されている4軀の仏像のうち、向かって右側に安置される2軀である。

如来像は、通肩の衲衣をつけて結跏趺坐する半丈六の像で、両手先が後補のもののため惜しまれる。両腕が膝上にあるところを見ると、釈迦如来の禪定印か、阿弥陀如来の定印を結んでいたことが考えられるが、尊名は決めがたい。桧材の寄木、内刳り像で、ふっくらとした丸い相好、伏し眼に刻んだ両眼、小さな口もとや、なで肩で穏やかな体部のモデリングなどから、制作は平安時代末期(12世紀前半)のころと考えられ、その切れ長の目や、胸を大きく広げるところなど、全体にのびのびとした気分を漂わせる。

如来像に向かって右に等身の菩薩立像が安置されている。頭体を通して正中線で左右二材を矧ぐ寄木造の像であるが、両肩から手先までが後補材のため、当初の両手の形が明らかでない。丸味の強い顔、切れ長の目や胸の肉付けなどは、如来形坐像とよく似ているところから、おそらく、如来の脇侍像として、同一仏師により制作されたものと考えられる。

3. 木造菩薩形立像 1 軀 (平安時代)

守山市立入町110 東福寺

像高 182.1cm

宝髻を結び、天冠台を彫出し、地髪は毛筋彫りとし、耳朶環状、三道を彫出する。条帛をかけ、下半身に裳(折返し二段)をつけ、右手を屈し、左手を垂下して立つ。

桧。寄木造。彫眼。肉身漆箔。着衣古色。白毫、木嵌入。軀幹部は頭体を通して正中線で左右二材を矧ぎ、割首、内刳りを施す。裾部両側に小材を矧ぐ。両肩先、両足先、天衣をそれぞれ矧ぐ。

(説明) 東福寺本堂内陣の正面壇上の向かって左端に安置される等身の菩薩立像である。桧の寄木造、内刳り像であるが、この像も両肩から先が後補のため、尊名を明らかにしがたい。天冠台を丁寧彫



木造菩薩形立像 守山市 東福寺

り、地髪に毛筋を入れ、裳の衣文線も、他の菩薩立像とはかなり表現が異なる。胸から腹部にかけての肉付けも比較的豊かで、むしろ、横に安置されている半丈六の薬師如来坐像(重要文化財)によく似ているところから、薬師如来の脇侍、日光菩薩もしくは月光菩薩であった可能性も考えられる。本像の制作は、定朝様の作風を踏襲しながらも、いくぶん形式化が進んでいて硬さも見られるところから、12世紀後半ごろと考えられる。

工芸品

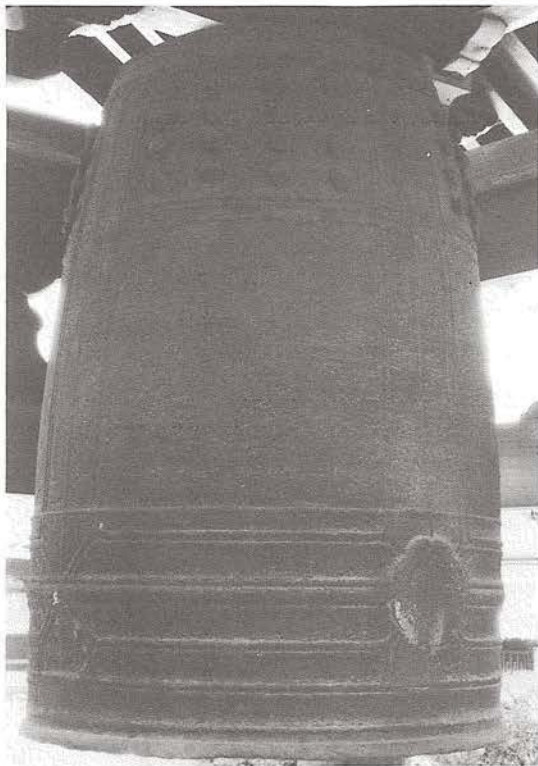
1. 梵鐘 1口 (鎌倉時代)

大津市真野町1500番地 正源寺

総高 98.8cm 口径56.0cm

銅製。肩からやや張りのある曲線が裾広がりになり、下縁寄りの中帯から垂直に下る。火焰宝珠を戴き、左右に円柱を噛む竜頭を据え、笠形は低い。上帯・下帯は素文。乳の間4区、4段4列の乳を配す。池の間1・2区にわたって刻銘がある。撞座は、竜頭と平行する位置にあり、八葉蓮華文を鑄出していたのであろうが磨耗が著しい。

(説明) 袈裟襷文を有する和鐘である。比較的小型で、撞座は下方にさがり、竜頭と平行する位置にあり、口縁に駒爪の出た鎌倉時代末期の通例の作品である。刻銘に、正応3年(1290)に真野庄の人々が願主となって



梵鐘 大津市 正源寺

神田社に奉ったことを記し、その後、天文2年(1533)にこの鐘が野洲郡の兵主社に移ったことを追記していて、鐘の所在の変遷が知られ興味深い。この鐘の大工矢田部宗次は、おそらく坂田郡山東町の鑄工とみられ、近江の鑄物師による作例としても注目される。

なお、寺伝によると、明治初年に兵主社から野洲郡中里村、西得寺に移されていたものを、明治34年に現在の正源寺に買い取られたといわれている。

書跡・典籍・古文書

1. 版本妙法蓮華經(百濟寺版) 8巻

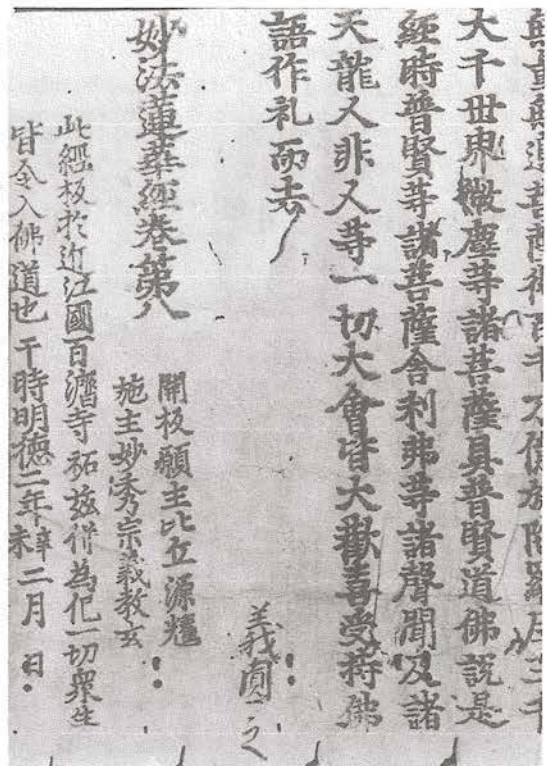
(南北朝時代)

甲賀郡甲賀町大字樺野1359 樺野寺

本紙 縦26.0cm前後 全長9.773~11.801m

(説明) この版経は、卷第八の卷末刊記から、明德2年(1391)2月近江百濟寺において、比丘源耀が願主となり、妙秀らが施主となって開版されたものである。卷子装8巻。料紙は楮紙を用い、1行17字、界はない。但し、各巻の第1紙・第2紙は江戸時代の春日版で補われている。

百濟寺は、天台の湖東三山の1つに数えられる名刹であるが、幾度も火災にあって往時の堂舎を失っている。本版経は、百濟寺の往時の隆盛を示す資料であるとともに、南北朝末期の版経とはいえ、これまでに知られていない地方版経として注目される。



版本妙法蓮華經 甲賀町 樺野寺